

『母となるマリヤの経験』 ルカ1:26-38

1:26 六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。

1:27 この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなづけになっていて、名をマリヤといった。

1:28 御使がマリヤのところにきて言った、「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。

1:29 この言葉にマリヤはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思いめぐらしていた。

1:30 すると御使が言った、「恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです」。

1:31 見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。

1:32 彼は大いなる者となり、いと高き者の子と、となえられるでしょう。そして、主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、

1:33 彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょう」。

1:34 そこでマリヤは御使に言った、「どうして、そんな事があり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。

1:35 御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう」。

1:36 あなたの親族エリサベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六か月になっています」。

1:37 神には、なんでもできないことはありません」。

1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。そして御使は彼女から離れて行った。

●序論

最初のクリスマスは、だれよりも早く、もっとも深く経験した人こそ、今日取り上げるマリヤだったということが出来るでしょう。

このクリスマスは、今、わたしたちにもその喜びが注がれている。神さまが与えてくださった祝福を今もわたしたちの人生で経験できることを知るときなのです。

●本論

I. 「恵み」が示される経験

マリヤが、特別な存在だとはっきり言える理由は、”ただ主が共にいてくださったから” なのだと御言葉を通してわかります。

1:28 御使がマリヤのところにきて言った、「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。

「恵まれた」と使う時、…そこには、それらの人との関係が良好で、またモノが豊か

であるという印象があります。

そういう意味で、マリヤは、よほど神さまとの関係が良好だったんだなあ。よほど神さまの目にりっぱな信仰者だったか…という、そんなことは記されていません。

★聖書が語る「恵み」は、神さまの側からの一方的な選びがあり、その御心でおおわれる人生なのです。

だから あらゆる疑問を超えて、わたしたちが注目すべきは、「神さまがマリヤに目を留められたという事実」を、恵みと呼んでいるということです。

天使が重ねてマリヤに” 神からの恵み” を語っています。

1:30 すると御使が言った、「恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。

ここで改めて、「なぜマリヤ？」という問いかけを人の側では持つでしょう。

彼女の選びを理解し、受け入れやすいように…と、彼女を特別な存在（マリヤの無原罪[罪がない、罪から守られていた]とする…、そういう考えや教えもあります。

しかし、聖書ははっきりとそれを一蹴します。強い言い方で申し訳ありません。聖書はすべての人が罪びとであり、神の栄光を受けられない…と語ります。それはこのマリヤも同様です。

しかし、そんな中で、神さまが彼女を選び、救い主の母としたことが恵みなのです。

「恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです！」

この神の恵みは、すべてを覆い、いやすものです。

はたしてわたしたちに対してもそうです。すべてを知るはずの神さまが、わたしたちを赦し、選び、用いてくださるといふ、これは恵み以外の何物でもありません。

ローマ3:23-24 すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。

ここに恵みがあるのです。マリヤはこの後、この恵みを心から賛美しています。

1:46-48 するとマリヤは言った、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。

マリヤが実感し、また表したこの賛美の告白こそ、彼女が経験した真実です。神の恵みの大きさだけをすべてとする告白です。そしてそれはわたしたちにも事実です。

Ⅱ. 神に目を向けられる経験

1:28 御使がマリヤのところにきて言った、「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。 1:29 この言葉にマリヤはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと、思いめぐらしていた。

聖書は、” とまどうマリヤ” と ” 信仰によって応答するマリヤ” の両面を描きます。突然の天使の出現。そして唐突に言われた、祝福の言葉。その時、マリアの心の

中にわき上がってきたのは、喜びではありませんでした。むしろ、「ひどく胸騒ぎがした」とあるように、ある種の不安を覚えたのです。

★ここで、申し上げなければなりません。だからこそ、これを「恵み」というのです。信仰生活が「わたし」から始まるのではなく、「神さま」から始まる。それこそが「恵み」始まりと言える理由なのです。

自分の必要から始まった呼びかけではない。自分の願いや求めがあったわけではない。しかし、神さまは、今日もご自身のご計画と、そのよい御心のために、神さまの方から私たちにふれ、語りかけ、人生に介入されるのです。

マリヤの応答から見直しましょう。

1:34 そこでマリヤは御使に言った、「どうして、そんな事があり得ましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。

それを受け止め御使いはこう告げます。

1:35 御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。

それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。

1:36 あなたの親族エリサベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六か月になっています。

1:37 神には、なんでもできないことはありません」。

み使いは神がマリヤになさる”神の御業”を語ります。

そして最後に一言で締めくくるのです。

「神には何でもできないことはありません」と。

天使はマリヤの目を、彼女自身の状況や問題にではなく、神さまに向けさせます。

聖書のことばは、いつでも、わたしたちの目を、自分や、だれか人や、状況や問題にではなく、神さまに向けてくれるのです。

神さまは、マリヤのことをよくご存じでした。神さまがそのマリヤを選ばれたことには神さまの意味と理由と目的があるのです。当然神さまは彼女の戸惑いも応答もよくご存じでした。

同様に、神さまは、わたしたちのこともよくご存じです。わたしたち自身のことをわたしたち以上によくご存じです。

ですから、わたしたちへのチャレンジは、その神さまの御言葉に耳を傾け、信頼して受け取り、その言葉に聞き従っていくことです。

Ⅲ. 信仰の言葉で応答する経験

1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。

自分の出来不出来や自分の抱えている問題ではなく、まことの神さまに目を向けていくマリヤは、そこで何よりも、自分を人生の主(あるじ・主人公)とするところから離れ、神さまを人生の主として心からへりくだって応答しているのです。

「わたしは主のはしため（召使）です。お言葉通りこの身になりますように」と。

突然の天使のあらわれ、告げられた信じられないほどの大きなこと、その対話の中で、マリヤがはっきり見えたのは、ただすべてに善いご計画をお持ちの神さまであったことがわかるのです。だから、すべてを神さまに信頼して、その言葉を受け取る。そこにマリヤの信仰の姿があります。「主は良いお方、善にして善をおこなわれる方」だと。

この後の人生で、まいりゃはイエスのゆえにさまざまな戸惑い、ジレンマを経験する。そして、あの十字架を前に、その胸を引き裂かれるような悲しみをも経験する人生とされていったのです。

そのすべてをご存じで神さまは、このマリヤを「恵まれた人」として呼び、ここで召してくださっています。

それは、このマリヤの痛みも悩みも苦しみを覆って余りある、すべての人の救いをもたらす神の良いご計画が成就するからです。

さいごに)

み使いが突然あらわれて「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」と言われて、「ひどく胸騒ぎして、何がおこったのと」思いめぐらす様子、男ですが、なんとなくわかる気がします。

そのあと御使いは、どんどん言葉を進めます。そういう状況をわたしは想像しました。

「あっ？わたしの耳の中を、あなた間の上を、次々と神さまのことばが流れていく。え？何が起こるの？ 自分に起こるの？ どうしてそうなるの？ 本当のことなの？ 祖どうすればいいの？」など、ある意味ふわふわと思うような様子はなかっただろうか…、そんなことを想像したのです。

マリヤの「どうして、そんなことがあり得まじょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」という言葉が、それをあらわしています。

しかし、天使はここで、神御自身とその力があなたを覆う、そしてすべてがその言葉の通り成就することを示します。

1:35 御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。…

そして最後に「1:37 神には、なんでもできないことはありません」と結ぶ。

その言葉に彼女の頭の上を漂っていたような言葉が、びしっと彼女の心に届いて信じる心をなしていったのです。

1:38 そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」。

わたしたちもまた、漠然と聞いてきた神さまの言葉を、あるときただ信仰によって応答すべき言葉として、“わかる” 経験がするでしょう。あなたにとって聖書の言葉は、頭をめぐるだけの言葉ではなく、あなたに応答を迫る言葉であることも覚えていきたいですね。